

## ◆◆◆ スリランカ国の気候変動に対応した防災能力強化プロジェクト 業務協力について

2004年12月のスマトラ沖地震・津波災害の後、自然災害に対する防災意識が高まり、世界的に早期警戒体制の整備や防災ネットワークの整備、コミュニティレベルでの防災教育などの国際協力事業が展開されています。スリランカ国においても、津波災害の後に、津波対策を含めた総合防災体制を樹立するために、国家防災委員会、防災人権省、防災センターを新たに設立し、自然災害に対する防災能力を強化する対策に取り組んでいます。

これに対し、防災先進国の日本からの支援として、防災センターを中心とした各防災機関（気象局、建築研究所、灌漑局、地方防災調整組織等）の能力を強化するプロジェクトが実施されてきました。2005～2006年に実施されたプログラム形成調査結果を基に、2006～2009年に上記機関の防災機能強化のための開発調査が実施され、防災関連機関を結ぶ省庁間ネットワークの導入、主要河川への自動雨量計・水位計の試験的な導入が行われました。

また、この調査と平行して2006～2008年には気象局への自動気象観測装置（AWS）導入の無償資金協力のための調査が行われ、昨年には全国38ヶ所へ自動気象観測装置（AWS）が導入されました。

今回はこれまでの支援の成果を生かした防災能力強化のプロジェクトが実施されることになり、防災センターの指導・調整能力の向上、気象局や灌漑局のリアルタイムのデータの観測・解析能力および予測能力の向上、土砂災害観測機関である建築研究所の土砂災害対策能力の向上及び関連省庁間での正確かつ迅速な情報伝達能力の向上等、各機関の能力向上を目的に掲げています。さらに、パイロット地域を選定し、防災センターからパイロット地域に発出される早期警報避難システムが適切に機能すること、パイロット地域における地方機関（県、郡、コミュニティの各レベル）での防災体制や防災能力が強化されることも目的としています。

本プロジェクトは約3年間にわたる計画ですが、各機関に日本側の担当者が断続的にかかわりつつ、所期の目的を達成するものです。本プロジェクトに対し、気象分野の担当として気象業務支援センターから派遣されることになりました。このプロジェクトは3月から始まったばかりで、現在、気象局担当者と協議を進めて具体的な活動計画を設定している段階ですが、今後も6月中旬、11月中旬とそれぞれ1カ月程度にわたり現地での業務を予定しており、機会があればプロジェクトの進捗状況をお知らせしたいと思います。

話題は変わりますが、3月23日は世界気象デーでした。当日気象局に出勤すると、予報官は通常の半分の2人、観測官も通常の半分以下の2人、管理職やその他の日勤職員の姿も見られないので担当職員に尋ねると、講堂で世界気象デーの記念行事を行っているとのことでした。講堂を訪れたところ、気象局が所属する防災人権省の次官代理が出席し、記念式典が行われていました。記念式典終了後には、屋外でティーパーティーが行われました。スリランカというお国柄の一面を垣間見る光景でした。

講堂入り口には、スリランカの気象局及び他機関の協力気象観測所の配置図パネルや気象局の沿革が展示され、本館の一室には、Meteorological Museum（気象資料館）が臨時に開設されて気象測器の展示が行われていました。また露場では観測装置を取り付けたラジオゾンデのバルーンやパイロットバルーンが係留されていました。



世界気象デー記念式典会場

さらに、昼前には社会見学なのか小学生の団体が気象局を来訪し、露場で気象観測の説明を受けていました。午後にも小学生の団体、中学生の団体が訪れ、同様に露場で気象観測の説明を受けています。その後も、この週は3回、1日に2~3組の児童・生徒達が気象局の見学に来ています。スリランカでは1月から新年度が始まったこともあるので、今が遠足や社会見学会の時期に当たっているのかも知れませんが、気象観測の現場や気象局の業務が、広く子供達に公開されている現状を見て、本プロジェクトの成果も次の世代に受け継がれてゆくことになると、改めて襟を正しました。



気象局の施設を見学する小学生

露場に児童・生徒を入れてもよいのか、との素朴な疑問を抱かれる方もおられるでしょうが、左写真に紹介した露場は実際の観測に使用する施設と同じものを設置したダミーの露場で、見学者専用です。また、自由に測器に触れることもできます。実際の観測業務は写真右側に設置された観測露場で実施されており、部外者の立ち入りは制限されています。このような配慮をしている点も、スリランカ気象局独自のアイデアと感心しました。

(財団法人気象業務支援センター振興部専任主任技師 山本忠治)